常設研究

「唯識思想の研究――『大乗荘厳経論』チベット訳・安慧釈・無性釈の相互関係と留意点――」

岩本明美

＜略号・参照文献＞

C　チョーネ版チベット大蔵経（The Institute for Advanced Studies of World Religions, マイクロフィッシュ）

D　デルゲ版チベット大蔵経（東京大学印度哲学印度文学研究室編）

N　ナルタン版チベット大蔵経（京都大学所蔵）

P　北京版チベット大蔵経（鈴木学術財団影印版）

Hayashima本　Osamu Hayashima, "(Chos yoṅs su tshol ba'i skabs or) Dharmaparyeṣṭy (Adhikāra), The XIth Chapter of the Sūtrālaṃkāravṛttibhāṣya, Subcommentary of the Mahāyāna-Sūtrālaṃkāra," Part II『長崎大学教育学部人文科学研究報告』27：73-119, 1978.

Lévi本　Sylvain Lévi (ed. Skt.), *Mahāyāna-Sūtrālaṃkāra*, tome I, Paris, 1907.

MSA『大乗荘厳経論』偈頌のみのテクスト：*Theg pa chen po mdo sde'i rgyan źes bya ba'i tshig le'ur byas pa*, D. (4020) Sems tsam 1, phi 1b1-39a4; P. (5521) [108] phi 1b1-43b3.

MSABh(Skt)『大乗荘厳経論』サンスクリット原典（*Mahāyānasūtrālaṃkāra*).

MSABh(Tib)『大乗荘厳経論』チベット訳：*mDo sde'i rgyan gyi bśad pa* (**Sūtrālaṃkāra-vyākhyā*, or *-bhāṣya*), C. phi 124b1-255a7; D. (4026) Sems tsam 1, phi 129b1-260a7; N. (3518) phi 129b7-279a7; P. (5527) [108] phi 135b7-287a8.

MSAT『大乗荘厳経論』無性釈：*Theg pa chen po'i mdo sde'i rgyan gyi rgya cher bśad pa* (**Mahāyānasūtrālaṃkāra-ṭīkā*), C. bi 38b5-174b1; D. (4029) Sems tsam 2, bi 38b6-174a7; N. (3521) bi 41a7-194a4; P. (5530) [108] bi 45a5-196a7.

SAVBh『大乗荘厳経論』安慧釈：*mDo sde'i rgyan gyi 'grel bśad* (**Sūtrālaṃkāra-vṛtti-bhāṣya*), C. mi 1b1-tsi 266a7; D. (4034) Sems tsam 3, mi 1b1-Sems tsam 4, tsi 266a7; N. (3522) mi 1b1-tsi 298a4; P. (5531) [108] mi 1b1-[109] tsi 308a8.

岩本明美　1995「『大乗荘厳経論』第14章世親釈 Skt. テキスト」『禅文化研究所紀要』21：1-29.

岩本明美　1996「『大乗荘厳経論』第14章「教授教誡章」の背景 I ―付 『大乗荘厳経論』第14章世親釈和訳―」『禅文化研究所紀要』22：45-99.

岩本明美　1998「『大乗荘厳経論』第13章「修行章」―サンスクリットテクストと和訳―」『インド学チベット学研究』3：52-91.

小谷信千代　1984『大乗荘厳経論の研究』文栄堂.

長尾雅人　2007　長尾重輝編『＜大乗荘厳経論＞和訳と註解―長尾雅人研究ノート―(2)』長尾文庫

能仁正顕（編）2009『＜大乗荘厳経論＞第 I 章の和訳と注解―大乗の確立―』自照社出版.

袴谷憲昭　2008「『大乗荘厳経論』第一四章第三四-三五頌のアスヴァバーヴァとスティラマティとの註釈」("Asvabhāva's and Sthiramati's commentaries on the *MSA*, XIV, 34-35", 1978の改訂和訳版)『唯識文献研究』大蔵出版.

I．はじめに

龍谷大学仏教文化研究所の常設研究プロジェクト「唯識思想の研究」班では，初期瑜伽行唯識学派の中心テクストの一つである『大乗荘厳経論』サンスクリット原典の解読を中心に唯識思想の研究を進めており[1)]，筆者も末席を汚している。インドで4，5世紀頃に成立したと推定される『大乗荘厳経論』には，そのチベット訳と漢訳，さらに数多くの註釈書が存在する。諸註釈書のうちで，現在もっともよく参照されているのは，チベット訳でのみ伝わる安慧釈（SAVBh）と無性釈（MSAT）であり，当該プロジェクトの研究会でも同様である。

この両註釈書の関係については研究の途上にあり，多数を説得し得るほどの見解は未だ示されていない。近年，瑜伽行派諸論師たちの系譜が，佐久間秀範氏によって洗い直されている。氏はその一環として，両註釈書の先後関係についても検討し，仮説を提示している。その仮説は，筆者の想定と相反する。佐久間氏は無性釈が安慧釈に先行すると考えるが[2)]，筆者は，無性釈は安慧釈を前提として書かれたテクストである，という強い感触を持っている[3)]。両註釈書の相互関係が明らかになれば，それは我々が唯識思想史を解きほぐす鍵をひとつ手に入れたことを意味する。

本稿では，筆者が看取した両註釈書の特徴や翻訳上の問題点を整理する。主に『大乗荘厳経

1）能仁（2009）は，当研究班の最近の大きな成果である。

2）日本印度学仏教学会第61回学術大会（大正大学，2010年9月）の発表（佐久間秀範「無性と安慧の関係をめぐる覚え書き」）でも同様であった。

3）筆者は，**Mahāyānasūtrālaṃkāra-ṭīkā*（無性釈）の "ṭīkā" とは，そういう意味をもっているのではないかとさえ思うことがある。

論』の第13章と第14章を精査した成果の一つである。両註釈書の相互関係に関して正確な理解を得るためには，全章を精読する必要があろう。ここに指摘することが，その際の一助となることを願う。なお，本稿では，安慧釈と無性釈の問題に加え，無性釈と同じ訳者による『大乗荘厳経論』チベット訳（MSABh (Tib)）の問題についても取り上げる。

『大乗荘厳経論』サンスクリット原文とその和訳は，拙稿1995・1996・1998から引用した（和訳は，多少改められている箇所もあり得る）。一方，MSABh (Tib)，MSAT，SAVBhに関しては，2001年秋に京都大学へ提出した学位請求論文（課程博士）「『大乗荘厳経論』の修行道 ―第13・14章を中心として」所収の筆者が作成したテクストから引用した（当該博士論文は，なるべく早く，ほぼそのままの形でオンデマンド出版する予定）。三テクストとも，チョーネ版，デルゲ版，ナルタン版，北京版を校合したもので，本稿に引用したテクストにも，それらの異同をすべて示したが，引用の相当箇所についてはデルゲ版のみ示した。また，それらに拙訳も付したが，試訳と呼べるものでさえない（博士論文にも含まれていない）。読者の便を考えてのことであるが，余計であったかもしれない。なお，「第13章第1偈の長行釈 (I-iv)」という形式で表記した引用箇所のI-ivは，筆者がテクストを区切るのに用いたサブセクション番号である。セクションとサブセクションについては，拙稿（1995: 5）を参照。

II. 安慧釈

『大乗荘厳経論』チベット訳と無性釈が『デンカルマ目録』（順次No. 627, 628）に記載されているのに対し，安慧釈は記載がなく，蔵訳年代はそれらに比べ遅いと推定される[4]。安慧は，およそ八百の偈頌と長行釈から成る『大乗荘厳経論』のすべての偈頌を注釈するが，一偈を一度に引用することもあれば，分割して引用し説明する場合もある。長行釈についてはすべてを注釈するわけではないが，しばしば偈に対してなされた注釈内容がそのまま繰り返され，安慧釈をくどく，冗漫に感じさせる原因となっている。

一方，翻訳のクオリティについていえば，『大乗荘厳経論』チベット訳と無性釈がチベットで後世に吐蕃の三大翻訳師の一人とされるペルツェク (dPal brtsegs) による名訳であるのに比べ，安慧釈のチベット訳はかなり悪い。安慧釈には，*Mahāvyutpatti*に従わない訳語が少なからず存在し，基本的な術語に対してさえ訳語にバラツキがある(1)。また，サンスクリット原文のあからさまな誤読もある(2)。さらに本論からの引用文（偈頌及び長行釈）を翻訳する際，それらに対する安慧の注釈から得られる情報が付加されている場合がある(3)。以下，順次，1と2と3の具体例を挙げる。

4）袴谷憲昭氏は，『青冊』（*Deb ther sṅon po*）では安慧釈のチベット訳者lCe bkra śisが前伝期に在世したと記されていることを指摘している（袴谷 2008：414）。

II-1. 訳語のバラツキ

avavādaの訳語

第14章第3偈

【MSABh (Skt)】

dharmasrotasi buddhebhyo 'vavādaṃ labhate tadā /
vipulaṃ śamathajñānavaipulyagamanāya hi //3//
そのとき［かの菩薩は］，法の流れにおいて，止 (śamatha) と智 (jñāna) の広大さに進むために，諸仏から広大な教授を獲得する。

【SAVBh, D262b2】

chos kyi rgyun la[5]saṅs rgyas las //
źi gnas rnam par rgyas pa daṅ //
ye śes rgyas par 'gyur ba'i phyir //[6]
de tshe luṅ bstan thob par 'gyur //[7](3)

第14章の章題 (Avavādānuśāsanī) にも含まれる "avavāda" が，この第14章第3偈では，"luṅ bstan" と訳されているが，第14章で "avavāda" の訳語として "luṅ bstan" が使用されるのはこの一例のみである。その他は標準的な "gdams pa" が用いられている。

pada-prabheda の訳語

第14章第5偈ab句

【MSABh (Skt)】

tataḥ padaprabhedeṣu vicared anupūrvaśaḥ /
そして次に彼は，個々の語に，順次随わなければならない。

【SAVBh, D263a2】

5) CDP las; N la.
6) CDP //; N /.
7) NP *om.* //.

de nas tshig tu spros[8]pa la[9]//[10]
rim gyis rnam par brtags nas su //[11] (5ab)

第14章第5偈ab句の長行釈 (IV-iv)

【MSABh(Skt)】

anucaracittaṃ yena sūtrādināṃ nāmata ālambitānāṃ padaprabhedam anugacchati /
随行心は，その［心］によって［先に］名前の点で観想された経などの，個々の語に随行する。

【SAVBh, D263b6】

rjes su dpyod pa'i sems ni gaṅ gis mdo sde la sogs pa'i miṅ la dmigs nas tshig rab tu dbye ba'i phyir rjes su 'gro ba'i (źes bya ba la /)

SAVBhは，"padaprabheda" を，第5偈ab句では "tshig tu spros pa" と訳し，その長行釈では，"tshig rab tu dbye ba" と訳している。後者の方が適切である。

Pariniṣpanna-svabhāva *or* pariniṣpannaḥ svabhāvaḥの訳語

第14章第34偈c句の長行釈 (XVI-iii)

【MSABh (Skt)】

prakṛtiśūnyatā pariniṣpannaḥ svabhāvaḥ śūnyatāsvabhāvatvāt /
本来的な意味での空性というのは，円成実性である。空性を自性としているから。

【SAVBh, D274b7】

stoṅ pa'i raṅ bźin gyi[12]phyir yoṅs su rdzogs pa'i ṅo bo ñid ni raṅ bźin gyis stoṅ pa'o (źes bya ba la /)

8) CDN spros; P spos.
9) CD las; NP la.
10) CDN //; P /.
11) CD nas su //; NP na su.
12) CD gyis.; NP gyi.

円成実性 (pariniṣpanna-svabhāva *or* pariniṣpannaḥ svabhāvaḥ) の訳語は，第13・14章ではこの一例 (yoṅs su rdzogs pa'i ṅo bo ñid) を除き，標準的な yoṅs su grub pa'i raṅ bźin が用いられている。

mūrdhāvasthāの訳語

mūrdhāvasthā（頂位）の訳語としては，第14章では，次の三種が用いられる。

(i) rtse mo'i dus: 第1偈bcd句に対する注釈 (SAVBh, D262a3)
(ii) rtse mo'i gnas skabs: 第24偈ab句の長行釈 (IX-v) に対する注釈 (SAVBh, D271b2)
(iii) spyi bo'i dus *or* spyi bo: 第24偈ab句に対する注釈 (SAVBh, D270a7)，第27偈cd句に対する注釈 (SAVBh, D272a1)

II-2. 誤訳

安慧釈に引用される偈頌及び長行釈については，サンスクリット原文との対比が可能なので誤読が明白となる。好例を二つ挙げる。

第13章第21偈ab句

【MSABh(Skt)】

sattveṣu hitakāritvān naity āpattiṃ sa rāgajām /21ab
かの［菩薩］は，衆生に対して利益をなす者であるので，貪愛から生じる罪には相当しない。

【SAVBh, D257b5】

sems can la ni phan byed na //
chags bcas ñes par mi 'gyur ro //(21ab)

SAVBh（衆生を利益する場合，貪愛を伴う罪とはならない）は，"sa rāgajām" を，"sarāgajām" と読んだと考えられる。

第14章第24偈ab句の長行釈（IX-iv）

【MSABh(Skt)】

ayaṃ sa āloko yam adhikṛtyoktaṃ *Kṣāranadyām* / āloka iti dharmanidhyānakṣānter

etad adhivacanam iti /
ここに「光明」というのは，それをテーマとして『灰河経』(*Kṣāranadī*)に，「光明というこれは，法を観察する忍(dharmanidhyānakṣānti)の別名である」と説かれている，その光明のことである。

【SAVBh, D271a5】

snaṅ ba'i dbaṅ du byas nas chu lan tshwa can gyi snaṅ ba'o źes gsuṅs pa de ni chos la rtog pa bzod pa'i tshig bla dags so (źes smos te /)

このチベット文を素直に読むと「光明をテーマとして鹹河の光明であると述べられた，それは，法を観察する忍の別名である」となり，原文と意味がずれる。これは，処格の "kṣāranadyām" を属格に取り違えたためであろう。

SAVBhには，『大乗荘厳経論』からの引用部分のみならず，おそらく安慧自身の注釈部分にもチベット訳者によるかなりの読み違いが含まれているものと推察される。サンスクリット原文が得られないのではっきりしないだけであろう。SAVBhを扱う場合は，この点に関して細心の注意を払う必要がある。

II-3. 安慧の注釈情報が付加された引用部分の翻訳

安慧釈の『大乗荘厳経論』からの引用部分には誤読のみならず，サンスリット原文からは得られない情報，つまり安慧の注釈内容を取り込んだ翻訳が存在する。それを顕著に示す例を，二つ挙げる。

第13章第1偈の長行釈 (I-iv)
【MSABh(Skt)】

abhāve ca śūnyatāsamādhiḥ parikalpitasya svabhāvasya /
遍計所執性が存在しないことに関しては，空三昧がある。

【SAVBh, D248b7】

kun brtags raṅ bźin gñis med pa la stoṅ pa'i tiṅ ṅe 'dzin gyis so źes bya ba la kun brtags kyi chos daṅ gaṅ zag gi raṅ bźin med de / ci'i phyir źe na / miṅ daṅ mtshan

ma daṅ tha sñad daṅ / brtar kun tu brtags pa thams cad ni ri boṅ gi rwa bźin du yod pa ma yin pa'i phyir ro // kun brtags raṅ bźin med pa ni stoṅ pa ñid kyi tiṅ ṅe 'dzin gyis śes so // ci'i phyir źe na / stoṅ pa ñid kyi tiṅ ṅe 'dzin ni kun brtags kyi chos daṅ gaṅ zag la bdag med pa daṅ / stoṅ par bsgom pa'i rnam pa yin pa'i phyir ro //

遍計所執性は，二つが存在しないことについては，空三昧によってであるといわれているが，遍計された法と人の自性は存在しない。何故かといえば，名前や特徴や言語習慣（tha sñad）や言語契約（brta）において遍計執された一切は，兎の角のように存在することはないからである。遍計所執性が存在しないことは空三昧によって知る。何故かといえば，空三昧は遍計執された法や人に我がなく，空として修習する仕方［を持つ］からである。

本論の引用は，「遍計所執は二つの自性が存在しないことについては，空三昧によってである」とも読み得るが，いずれにせよ，二つ（gñis）という語は原文には存在しない。この，「二つ」とは，安慧の注釈にいう，遍計された法と人の自性のことに他ならない。

第13章第22偈（d句）

【MSABh（Skt）】

yathā kapotī svasutātivatsalā
svaputrakāṃs tān upaguhya tiṣṭhati /
tathāvidhāyāṃ pratigho virudhyate
suteṣu tadvat sakṛpe 'pi dehiṣu //22//

自分の子供を溺愛する雌鳩が，自分の子供たち，彼らを覆っている。そのような性質の［雌鳩］においては，子供たちに対する嫌悪は相反する。ちょうどそのように哀れみ深い［菩薩］においても，身体を有する［衆生］に対する［嫌悪は相反する］。

【SAVBh, D258a2】

ji ltar phug ron bdag gi bu la byams //
bdag gi bu de sbas nas 'dug pa na //
de lta bu la źe sdaṅ 'gal pa ste //
raṅ bźin sñiṅ rje can gyi lus can la //(22)

d句（本性として慈悲をもつ［菩薩］の身体を有する［衆生］に対する）の中の「本性として」（raṅ bźin）は，原文にはなく，「本性として慈悲をもち，つまり愛情を本質としている菩

薩は，一切衆生を一人息子と同様に考える」(byaṅ chub sems dpa' raṅ bźin gyis sñiṅ rje daṅ ldan pa / byams pa'i bdag ñid can sems can thams cad la bu gcig pa daṅ 'dra bar dgoṅs pa ste) という第22偈に対する安慧自身の注釈を取り込んだ訳となっている。

ところで，どうしてこのような現象が生じるのであろうか。安慧の参照したサンスクリット本と現行サンスクリット本との相違による，というよりはむしろ，翻訳者が安慧の注釈に過度に影響されたためであろう。

III. 無性釈

再三指摘されているように，無性釈は安慧釈と軌を一にし，同じ経典を引用している[13]。しかしながら，無性の注釈方法は，安慧とは対照的である。無性は，安慧のように原典のすべての偈頌を注釈するのではなく，注釈を加える偈頌を選択し，時には偈の順序を入れ替えたり[14]，さらに後に例を出すように偈を多少改変して，注釈している。

また，偈を引用しない場合でもその偈の長行釈は引用して注釈するなど，その注釈方法は奔放かつ合理的である。そしてその注釈内容は極めて簡潔であり，簡潔すぎて安慧釈の対応箇所を参照してはじめて主題が明らかとなる場合さえある。その他，無性の注釈スタイルで注記すべきこととして，無性が六つの心を主題とした第14章第４・５・６偈の注釈をする際に，その三偈の本論の長行釈が殆どそのまま無性自身の注釈として援用されていることが挙げられる[15]。

では，無性が偈頌を改変している例を示そう。

第14章第21偈

【MSABh (Skt)】

aparicchinnam ābhāsaṃ dharmāṇāṃ vetti sarvataḥ /
akalpitāni saṃśuddhau nimittāni prapaśyati //21//
彼は，諸法の［無限の］限定されていない顕われを，ことごとく［まるごと］知る。彼は，清浄 (saṃśuddhi) に関する，分別されていない諸特徴 (nimitta) をみる。

【MSABh (Tib), D191b5】

chos rnams snaṅ ba thams cad du //
yoṅs su chad pa med rtogs 'gyur //

13) たとえば，小谷(1984：17-19)参照。
14) たとえば，第14章では，序文に続きまず，第３偈が引用注釈され，その後に第１偈ａ句がくる。
15) MSAT, D112a5-112b6参照。

yaṅ dag pa yi rgyu mtshan[16]ni //
ma brtags pa dag rab tu mthoṅ //(21)

【MSAT, D113b6】

yoṅs su chad pa med pa daṅ //
yaṅ dag pa yi mtshan ma ni //
ma brtags pa dag rab tu mthoṅ //(21acd)
分断なきものと，分別されない清浄の相を彼はみる。
źes bya bas thob pa'i dus na[17]lus las srin bu phyir 'byuṅ bar mthoṅ ba daṅ / lus mi gtsaṅ bas spags pa sbyoṅ bar mthoṅ ba daṅ / de lta bu la sogs pa brtags pa ma yin pa'i mtshan ma dag[18]mthoṅ ste / rgyas par ni *'phags pa Blo gros mi zad pa'i mdo chuṅ ṅu* las mtshan ma kun tu 'byuṅ ba bźin blta bar bya'o // 'di dag ni yoṅs su chad pa med pa daṅ / ma brtags pa'i phan yon yin te / 'di gñis ni **lhag mthoṅ gi phyogs daṅ mthun pa** yin[19]par rig par bya'o //
という偈によって，[清浄を]得たとき，体から虫が出て行くのをみたり，汚物にまみれた体が浄まるのをみたり，このような分別されない相をみる。詳しくは，『大宝積経無尽慧菩薩会』にすべての相について述べられている通りである。これらが，分断なく，分別されない徳である。この二つが，**観の範疇**であると知られるべきである。

さて，MSAT（無性釈）では，aparicchinnam （ābhāsam）が，akalpitāni nimittāniとともに，prapaśyatiの目的語として註釈されているが，原典では，aparicchinnam （ābhāsam）は，vettiの目的語である。おそらく無性は，簡潔に注釈しようとして，第21偈を改変したと推察される。ちなみに，安慧には無性のような改変は見られず，以下のごとく，第21偈をab句とcd句とに分割して注釈している。

【SAVBh, D269b2】

thams cad chos dag śes pa ni //
yoṅs su ma chad snaṅ bar ro //[20] (21ab)
あらゆる諸法を知ることが，分断なき顕現である。

16) この場合の "nimitta" に対する訳語として "rgyu mtshan" は適切でない。MSATは "mtshan ma" と適切に訳出しているので，もとは "mtshan ma" であった可能性もある。
17) CDN na; P nas.
18) NP *om.* dag.
19) NP *om.* pa yin.
20) NP *om.* //.

źes bya ba la / chos kyi sgras ni mdo sde la sogs pa gsuń rab yan lag bcu gñis la bya' o // des kha cig śes / kha cig mi śes pa dań / bar 'ga' śes bar 'ga' mi śes pa ni ma yin gyi dus thams cad du thams cad śes pa ni yońs su ma chad pa snań ba źes bya ste / de ltar lus dań sems las su ruń bar gyur pa dań / gsuń rab yan lag bcu gñis ni chos thams cad la yońs su ma chad pa'i tshul du śes pa'i snań ba 'byuń ste / 'di ni yon tan rnam pa bźi pa'o //

といわれているが，「法」の語は，経など十二分教の意味で使われている。彼があることを知っていたり知らなかったりとか，また別のあることを知っていたり知らなかったりとかというのではなく，あらゆる時にあらゆることを知ることが，「分断なき顕現」といわれるのである。このようにして身心がふさわしいものとなり，十二分教すなわち一切諸法に対して分断のない仕方で知る顕現が生じる。これが「第四の徳」である。

rnam par dag pa'i mtshan ma yań //[21]

ma brtags par ni rab tu mthoń //[22] (21cd)

清浄の相を分別せずにみる。

źes bya ba la / rnam par dag pa'i sgras ni sa dań po la bya ste / sa dań po 'thob par 'gyur ba'i mtshan ma dań[23] rtags dag kyań ma brtags ma bsams par rmi lam du lus las srin bu 'dzag[24]pa dań / mi gtsań bas lus bskus pa las khrus byed pa la sogs pa lus kyi skyon dań bral ba dag rmi lam du mthoń bar 'gyur te / 'di ni yon tan lńa pa'o // de ltar chos thams cad la yońs su ma chad pa'i snań ba thob pa dań / rnam par dag pa'i mtshan ma ma brtags par mthoń ba gñis ni **lhag mthoń gi phyogs** so //

といわれているが，「清浄」という語は，初地の意味で使われている。初地を得るようになる兆相を分別せず考えずに，つまり夢の中で体から虫が流れ出したり，また汚物によって汚れた体から［汚れを］洗い流したりなど，体の汚れを離れることを夢の中でみるようになる。これが第五の徳である。以上，一切諸法における分断のない顕現を獲得することと，清浄の相を分別せずにみることの二つは，**観の範疇**である。

IV. チベット訳

『大乗荘厳経論』チベット訳は，サンスクリット原文を復元するうえで，サンスクリット写本と同等の価値をもつほど，貴重な資料である。第13章と第14章のチベット訳テクストを校訂した結果，留意すべき事実が明らかとなった。

21) CDN //; P /.
22) NP *om.* //.
23) CD dań /; NP dań.
24) CD 'dzag/; NP 'dzags.

『大乗荘厳経論』チベット訳の翻訳者も，MSATと同様に，大校閲翻訳官であったペルツェクである。彼は『大乗荘厳経論』をよく理解していたと考えられ，誤訳は非常に少ない。また同一語に対する訳語もほぼ完璧に統一されており，彼の周到な性格が窺い知られる。そしてその周到さ故であろう，チベット訳とMSATとに共通する部分の訳，すなわち偈頌，及び無性釈に引用・借用されている長行釈の訳文は，誤記等によると判断される若干の異同以外は，例外をのぞき完全に一致している。

この事実から，ペルツェクが両者を並べて翻訳したことは明らかである。注記すべきは，その際にペルツェクが無性の解釈に影響されて翻訳した可能性のある箇所が存在することである。その例として，第14章から二つ挙げる。

第14章第20偈 ab 句の dauṣṭhulyakāya の翻訳

【MSABh (Skt)】

kṛtsno **dauṣṭhulyakāyo** hi dravate 'sya pratikṣaṇam /20ab
彼にとっては，「麁重の集まり」すべてが，一瞬一瞬，溶解消滅し去る。

この "dauṣṭhulyakāya" に対し，MSABh (Tib)，SAVBh，MSATは，それぞれ異なった訳語を与えている。しかも，そのうちのどれも，筆者の読みと一致しない[25]。これらの訳語をめぐっては，複雑な問題がある。まず各々の当該箇所を引用しよう。

【MSABh (Tib), D191b4】

lus la[26]gnas ṅan len pa kun //
skad cig re re la zad 'gyur //(20ab)

【SAVBh, D269a5】

gaṅ phyir lus kyi gnas ṅan len //
skad cig re rer kun sbyoṅ daṅ //[27] (20ab)
なぜなら麁重の集まり（or 身体の麁重？）は刹那ごとにすべて浄まるからである。
źes bya ba la / yon tan rnam pa lṅa ston te[28]/ lus kyi gnas ṅan len gyi sgras ni lus las

25) もっとも筆者自身，百パーセント確信して「麁重の集まり」と読んでいるわけではない。別の読みも捨てきれずにいる。しかしそれに立ち入ると，別な論点が加わって相当複雑な議論をなさねばならなくなるため，今回はその点には立ち入らない。
26) CDNP las; MSA la.
27) NP *om.* //.
28) CD to; NP te.

su mi ruṅ ba daṅ / sems las su mi ruṅ ba gñis la bya ste / lus las su mi ruṅ ba ni lus lci ba daṅ[29]mi bde ba'o // sems las su mi ruṅ ba ni sems mi bde źiṅ dge ba la mi 'jog pa'o // dper na khrus mkhan gyis khrus rtsi daṅ chos gos daṅ ras la sogs pa'i dri ma skad cig ma re re la 'dag ciṅ sbyoṅ bar byed pa de bźin du de dag kyaṅ źi gnas chu daṅ 'dra bas lus las su mi ruṅ ba skad cig ma re re la 'dag ciṅ sbyoṅ bar byed do // 'di ni yon tan rnam pa gcig go //

というのは，五徳［のうちの第一の徳］を説いている。「麁重の集まり」という語は，身体の不適応性と心の不適応性の二つの意味で使われている。「身体の不適応性」とは，身体の鈍重と不快のことである。「心の不適応性」とは，心が不快で善に向かわないことである。たとえば沐浴している人が石鹸や衣服や綿などの汚れを刹那ごとに洗い浄めるように，かれら［菩薩］もまた水に相当する「止」によって「身体の不適応性」を刹那ごとに洗い浄める。以上これが「第一の徳」である。

【MSAT, D113b4】

'di'i[30]lus gnas ṅan len lus kun //
skad cig re re la zad 'gyur //(20ab)

彼にとっては，身体の麁重の集まりすべてが，刹那ごとに尽きる。

źes bya ba ni źi gnas ni chu lta bu ste / des gnas ṅan len de bul tog gi chus gos kyi dri ma bźin du lus las 'dag par byed do //

というのは，「止」は水のごとくであり，それによって麁重を彼は，石鹸水が衣の汚れを［洗い落とすように］，身体から洗い落とす。

さて，SAVBhの "lus kyi gnas ṅan len" は，直訳すれば「身体の麁重」ということになり，"dauṣṭhulyakāya"（麁重の集まり）に対する訳語としては不適切である。しかしこれを，「集まり」と読むべき "kāya" を「身体」と読んだことによる誤訳であると簡単に片付けてしまうわけにはゆかない。というのも，MSABh (Tib) が，"lus la gnas ṅan len pa"（身体の麁重），MSATが "lus gnas ṅan len lus"（身体の麁重の集まり）と訳出しているからである。

まず，MSABh (Tib) に着目してみよう。MSABh (Tib) は，第19章51偈の "dauṣṭhulya-kāyapratyakṣam" とその長行釈の "dauṣṭhulyakāyapratyakṣatvena" 及び "dauṣṭhulya-kāyasyālayavijñānasya" に対してはそれぞれ，"gnas ṅan len lus mṅon sum pa"，"gnas ṅan len gyi lus mṅon sum pa ñid kyis"，"gnas ṅan len gyi lus kun gźi" という適切な訳語を与

29) CD daṅ /; NP daṅ.
30) CD 'di'i; NP 'di.

えている。ペルツェクにおいては同一語に対する訳語のバラツキは殆どみられないことを考え併せるならば，問題の “lus la gnas ṅan len pa” は，“dauṣṭhulyakāya” を誤読したのではなく，「身体の麁重」と解したと考えられる。

次にSAVBh をみてみよう。安慧は，第11章49偈の “sadauṣṭhulya” を注釈するとき，二種の麁重を考え，次の二通りに説明する。

（i）gnas ṅan len daṅ bcas pa źes bya ba la gnas ṅan len rnam pa gñis te / lus kyi gnas ṅan len daṅ / sems kyi gnas ṅan len to // de la lus kyi gnas ṅan len ni srog gcod pa daṅ ma byin par len pa la sogs pa'o // sems kyi gnas ṅan len ni chags sems daṅ gnod sems daṅ yod med du rtog pa la sogs pa'o //

(ii) yaṅ na gnas ṅan len rnam pa gñis te / ñon moṅs pa'i sgrib pa'i bag chags daṅ śes bya'i sgrib pa'i bag chags so // (Hayashima本, p.118, ll.13--18)

さて，(i)の解釈で説明される「身体の麁重」(殺生，偸盗など）と「心の麁重」(貪，瞋，有無の分別など）のうちの「身体の麁重」に対する訳語，“lus kyi gnas ṅan len” は，当該の “dauṣṭhulyakāya” に対する訳語とピッタリと一致するのだ[31]。しかしこの例だけによって，蔵訳者が “dauṣṭhulyakāya” を誤読したのではなくて，安慧自身が「身体の麁重」と解釈しているのであると言い切ることはできない。何故なら「身体の麁重」と解するなら，それが「身体の不適応性」と「心の不適応性」ということになってしまい，不都合が生じるからである（もちろん「身体の麁重」が「心の不適応性」ということもあり得るだろうが，今はそういう詮索は抜きにする)。一方，誤訳と判断し，「麁重の集まり」を説明していると考えるならば，「麁重」に関する安慧の，(i)と(ii)とは別な理解を我々は得ることになる。筆者には後者の可能性の方がはるかに高いと思われる。

最後にMSATに目を転じるならば，ここにもまた新たな問題が生じているのを見出す。MSATは，“lus gnas ṅan len lus”（身体の麁重の集まり)，すなわち「麁重の集まり」と「身体の麁重」の両方を兼ね備えた訳語を与えているのである（この偈の導入部においては，“lus la gnas ṅan len gyi lus” とあり，“lus gnas ṅan len lus” がその短縮形であることがわかる)。無性の注釈内容をみてみると，安慧が「身体の不適応性」として説明した内容をそのまま取り込んだ恰好になっている。そこで推察されるのは，無性自身が注釈内容に合わせて，偈を多少改変したのではないかということである。そしてさらに，MSABh（Tib）とMSATの翻訳者が同一人物（ペルツェク）であることを思い起こすならば，無性釈に影響されたために，ペルツェクは，MSABh（Tib）において，“lus la gnas ṅan len pa” と訳出したという可能性も想定される。つまり，無性の解釈に従って，“dauṣṭhulyakāya” を「身体の麁重（の集まり)」

31) なお，(i) の解釈は，第11章第11偈の長行釈の “anuśaṃsamanaskāra” に対する注釈においてもみられる。

と理解したが，MSABh（Skt）には，“kāya” はあくまでも一つしかなく，それに忠実であろうとするならば，MSATのように “kāya” を二度訳出するわけにはゆかず，最終的に “lus la gnas ṅan len pa” という訳語に落ち着いたのではないのかと推測されるのである。

第14章第45偈 cd・第46偈 ab 句の長行釈

MSABh（Tib）において，無性の注釈に影響されて翻訳したのではないかと疑われる，もうひとつの例は，第14章第45偈 cd 及び第46偈 ab 句の長行釈である。まず，MSABh（Skt），MSAT，MSABh（Tib），SAVBhの関連箇所をすべて引用する。

【MSABh（Skt）】

vajropamaṃ samādhānaṃ vikalpābhedyam etya ca /
niṣṭhāśrayaparāvṛttiṃ sarvāvaraṇanirmalām //45//
sarvākārajñatāṃ caiva labhate 'nuttaraṃ padam /
yatrasthaḥ sarvasattvānāṃ hitāya pratipadyate //46//
そして分別によって破られない，金剛に喩えられる三昧を得て，
あらゆる障害の垢のない，「究極の転依」を獲得する。(45)
また「一切種智者性」(sarvākārajñatā) という無上の境地も獲得する。
そこ（無上の境地）に住する者は，一切衆生を利益することに取り組む。(46)

... bodhisattvo vajropamaṃ samādhiṃ labhate / vikalpānuśayābhedyārthena vajropamaḥ / tato niṣṭhāgatām āśrayaparāvṛttiṃ labhate sarvakleśajñeyāvaraṇanirmalām / sarvākārajñatāṃ cānuttarapadaṃ yatrastho yāvatsaṃsāram abhisaṃbodhinirvāṇasaṃdarśanādibhiḥ sattvānāṃ hitāya pratipadyate /
……菩薩は，金剛に喩えられる三昧を獲得する。分別の随眠によって破られないという意味で，金剛に喩えられる。その後，あらゆる煩悩障と所知障の垢のない，「究極［の段階］にある転依」を獲得する。また「一切種智者性」という無上の境地も獲得する。そこ（無上の境地）に住する者は，輪廻の続く限り，現等覚や涅槃を示現したりして，衆生の利益に取り組む。

【MSAT, D115b4】

de'i 'og tu gnas gźan du 'gyur ba'i mthar phyin pa 'thob bo // źes bya ba ni kun gźi rnam par śes pa la gnas ṅan len ma lus par spaṅs pas rdo rje lta bu'i tiṅ ṅe 'dzin gyi mjug thogs su gnas gźan du gyur pa mthar thug pa 'thob bo //
そののち，「究極の転依」を獲得するというのは，アーラヤ識における麁重を余すところなく断つことによって，金剛喩定に続いて「究極の転依」を獲得するという意味である。

thams cad mkhyen pa ñid kyi go 'phaṅ bla na med pa ñon moṅs pa daṅ /śes bya'i sgrib pa thams cad kyi dri ma med pa 'thob bo // źes bya ba ni lam gyi gnas yoṅs su gyur pa thob pa'o //

無上の，あらゆる煩悩障と所知障の垢のない，「一切種智者性」の境地を獲得するというのは，「道転依」を獲得するという意味である。

【MSABh (Tib) , D194a6】

rdo rje lta bu'i tiṅ ṅe 'dzin //
rtogs[32]pas mi śigs thob nas ni //
gnas gźan gyur pa mthar thug pa //
sgrib pa kun gyi[33]dri med daṅ //(45)
gaṅ la gnas nas sems can kun //
phan phyir rab tu sgrub byed pa //
rnam pa thams cad mkhyen pa yi //
go 'phaṅ bla na med pa 'thob //(46)
... byaṅ chub sems dpa' ni rnam par rtog pa'i bag la ñal gyis mi śigs pa'i don gyis rdo rje lta bu'i tiṅ ṅe 'dzin 'thob bo // de'i 'og tu gnas gźan du gyur pa'i mthar phyin pa daṅ / gaṅ la gnas nas 'khor ba ji srid par mṅon par rdzogs par byaṅ chub pa daṅ / yoṅs su mya ṅan las 'das pa yaṅ dag par ston pa la sogs pas sems can rnams la phan pa rab tu sgrub par byed pa thams cad mkhyen pa ñid kyi go 'phaṅ bla na med pa ñon moṅs pa daṅ / śes bya'i sgrib pa thams cad kyi dri ma med pa 'thob bo //

【SAVBh, D280a6】

da ni saṅs rgyas kyi sa bśad de de bas na
次に仏地を説く。それ故，
mthar thug pa na gnas 'phos śiṅ (45c)
究極における転依があり，
źes bya ba la sogs pa smos te / rdo rje lta bu'i tiṅ ṅe 'dzin bag la ñal phra mo spaṅs pa daṅ / de'i 'og tu saṅs rgyas kyi sar kun gźi rnam par śes pa sgrib pa gñis daṅ bral ba gnas 'phos pa mthar thug pa thob par 'gyur ro źes bya ba'i don to // sa daṅ po la

32) CD rtogs; NP rtog.
33) CDP gyi; N gyis.

yaṅ gnas 'phos pa yod mod kyi gnas 'phos pa mthar thug pa źes mi bya ste / ci'i phyir źe na / mthoṅ bas spaṅ bar bya ba'i ñon moṅs pa daṅ bral ba tsam gyis[34]gnas 'phos pa thob pa'i phyir ro // saṅs rgyas kyi sa'i dus na ni sgrib pa gñis kyi bag la ñal phra mo yaṅ spaṅs pa'i mtshan ñid kyi gnas 'phos pa thob pas na gnas 'phos pa mthar thug pa źes bya'o //

といったのである。金剛喩定は微細な随眠を断ち，その後で仏地においてアーラヤ識は二障を離れた究極の転依を獲得するだろうという意味である。初地においても転依は確かにあるけれども，「究極の転依」とはいわれない。何故かといえば，みることによって断たれるべき煩悩を離れた転依のみを獲得するからである。仏地においては，二障の微細な随眠をも断った特徴をもつ転依を獲得するので，「究極の転依」といわれるのである。

gnas 'phos pa mthar thug pa de 'aṅ ci 'dra ba źig ce na / de'i phyir /

その「究極の転依」はまたどのようであるのかといえば，それに対して，

sgrib pa kun gyi dri med pa //[35] (45d)

あらゆる障害の垢がない

źes bya ba smos te / gnas 'phos pa de yaṅ ñon moṅs pa'i sgrib pa daṅ śes bya'i sgrib pa'i dri ma kun daṅ bral bas na sgrib pa kun gyi dri ma med pa źes bya ste / 'dis ni spaṅs pa phun sum tshogs pa bstan to //

といったのである。その転依は煩悩障と所知障の一切の垢を離れているので，一切の障害の垢のないといったのである。これによって「断円満」を説いた。

rnam pa kun gyi ye śes ñid //[36]

bla na med pa'i gnas thob nas //[37] (46ab)

「一切種智者性」という無上の状態を獲得して，

źes bya ba la / gźan yaṅ saṅs rgyas kyi sa'i dus na rnam pa thams cad mkhyen pa'i ye śes bla na med pa'i ye śes kyi go 'phaṅs[38]yaṅ 'thob[39]ste / des ye śes phun sum tshogs pa bstan nas bdag gi don phun sum tshogs pa bstan to //

といわれているが，さらに仏地において「一切種智者性」，つまり無上の智という境地も得る。これによって「智円満」を説き終わって，「自利円満」を説いた。

さて，問題となるのは，長行釈の “sarvakleśajñeyāvaraṇanirmalā”（あらゆる煩悩障と所知障の垢のない）の読み方である。この語は，第45偈d句の “sarvāvaraṇanirmalā” を説明

34) CD gyi; NP gyis.
35) NP *om.*
36) NP *om.*
37) NP *om.*
38) CDN phaṅ; P 'phaṅs.
39) CD thob; NP 'thob.

する語である。サンスクリット原文では，両語とも，（究極の）転依（偈はniṣṭhāśrayaparāvṛtti, 長行釈はāśrayaparāvṛtti）の修飾句と読むのがごく自然である。SAVBhには当該の長行釈は引用されていないが，偈の方は当然そのように読まれている。しかるに，MSATでは，“sarvakleśajñeyāvaraṇanirmalā” は，「一切種智者性」の修飾句とされているのだ。（なお，MSATには，45偈も46偈も引用されない。）

第9章第2偈前半（Lévi本 p. 33）には，“sarvākārajñatāvāptiḥ sarvāvaraṇanirmalā /”（あらゆる障害の垢のない，一切種智者性の獲得がある）とあるので，無性の読みは決して『大乗荘厳経論』の教義と合致しないとはいえないが，強引な読みであることに変わりはない。少なくとも，「一切種智性」と「究極の転依」との双方の修飾句として扱うべきであろう。

だが，興味深いことに，MSABh（Tib）でも長行釈の “sarvakleśajñeyāvaraṇanirmalā” が，MSATと同様に，「一切種智者性」の修飾句として扱われているのである。MSABh（Tib）が，偈の “sarvāvaraṇanirmalā” を，サンスクリット原文に忠実に，「転依」の修飾句として翻訳していることを鑑みるなら，長行釈の強引な読みは，無性の注釈に引きずられた結果ではなかろうか。

以上，MSABh（Tib）が無性釈に影響され，強引な読みをしたと考えられる例を第14章から二例挙げた。残念ながら第13章にはこのような影響関係はみられなかった。もっとも第13章には，無性が偈頌あるいは長行釈を改変したり，強引な読みをしたりする例は見当たらないので対象外とすべきなのかもしれない。ともあれ現時点では，『大乗荘厳経論』チベット訳における無性の解釈の影響を強く主張することはできない。しかし今後他章においてチベット訳に不自然な点を看取した際，無性釈を参照してみる価値はあるだろう。